

うち枝と云、おさへにおく物故打おきとも云也、橋の折枝などもあり、

〔嫁入記〕二小袖はこうばいを上になして、二ツにをりて、そでをばよりはへてひろぶたにをく、人にひく時はほそものをさきになしてひくなり、小袖をあまたかさねて、ひろぶたにうくる時は、はきもとをいとにて、一重にしてゆふなり、

一ひろぶたひく時は、たゝみにつけて、なをすなり、中にてはあつかはぬものなり、

〔玉露叢十三〕一同年寛永十六年に江戸大火、此時御城回祿ス、御城御普請出来シテ、御移徙ノ時、御一門

及ビ諸大名衆ヨリ献上物ノ品々、

一梨子廣蓋 十

尾張大納言義直卿

籠

〔倭名類聚抄十六〕籠唐韻云、籠籠二字、云波太古、今按所出未詳、籠虛紅反、一音龍、又力董反、古俗用、

〔箋注倭名類聚抄四〕按、廣韻上聲一董云、籠竹器、力董切、此所引即是、又平聲一東云、籠、西京雜記

曰、漢制天子以象牙爲火籠、盧紅切、其義相近、平聲三鍾云、籠、竹車、亦籠籠竹、音龍、非此義、源

君併引一音龍、非是、略中、按、今俗呼加吳蓋堅間、荒籠之總稱也、

〔日本釋名下〕籠雜器 籠 かごはかこみこむる也、又ことも云、こはかごの上を略せり、

〔東雅八器用〕籠コ 舊事紀に、鹽土老翁竹を取りて、太目籠、籠籠を作る、または堅間を作るとも云ふ、

堅間とは今之竹籠也といふこと見えたり、上古の時には、竹籠をカタマと云ひしなり、古事記に

は、無間堅間とあるし、日本紀には、無目堅間とあるされしによらば、籠籠といひ、堅間といふもの、

其目あると、目なきとに因りて、其名も同じからぬなり、これをコといひしは、物をコムルの義な

り、されば籠の字亦讀てコムルとは云ひし也、又讀てカゴと云ひしは竹籠也、カと云ひタケとい

ふは轉語也、カといふ音を開て呼ぶ時は、タケといふ語となり、タケといふ語を合せ呼ぶ時は、カといふ語になるなり、

〔延喜式三八〕凡應供大嘗會竹器、熬、筒、七十二口、煤籠、七十二口、料籠、竹口、乾、索、餅籠、廿四口、口別、十